

横浜国際福祉専門学校 竹田久美子

【目的】日常生活の中で高齢者と若者が触れ合う機会が少なくなっている近年、高齢化や高齢者の問題に関する正しい認識と知識を若い世代に伝えていくためには、学校教育や地域教育における積極的な取り組みが必要である。本研究では、小・中学校において高齢社会の問題やエイジング教育の指導者の立場にある教師が高齢者に対してどのようなイメージを抱いているのかについて調べ、それが学校でのエイジング教育の実践に与える影響について明らかにすることを目的とする。

【方法】本研究は、財団法人日本長寿社会開発センターからの委託研究として、国際長寿社会日本リーダーシップセンターが実施した調査「地域社会における高齢者に関する福祉教育の現状についての調査研究」の一部である。対象となったのは、札幌市・青森県・東京23区・長野県・静岡県・島根県・北九州市の小学校と中学校の教師で、担当教科は社会科、家庭科、保健体育、道徳。調査は1995年6月～7月に郵送法で行われた。調査数1974票のうち有効回答票数は751票(男性473、女性278)で、回収率は38.0%である。

【結果】①高齢者イメージを36項目の形容詞の対語を尺度とするSD法によって測定したところ、表れたイメージは「遅い」「静的」「弱い」「保守的」「賢い」「あたたかい」などであり、否定的なイメージがやや強い。②先行研究によって明らかにされた6つの因子別にみると、「活動・自立性」の評価が最も低く、「有能性」の評価が最も高い。③エイジング教育実施との関係でみると、これまでに「エイジング教育を受けた経験のある者」自分の授業で「エイジング教育を扱っている者」、授業の中で地域の高齢者との「交流活動を実施している者」においてイメージはより肯定的であった。